

## 博士學位論文要約

論文題目： 「協働モデル」の提示：

制度的支援の「狭間」を埋める新たな支援戦略

氏名： 史 邁

要約：

本研究は、従来の制度的支援における「狭間」問題に着目し、その解決に寄与する「協働モデル」という新たな支援戦略を理論的・実証的に提示することを目的としている。こうした新しい支援戦略の提示を通して、①「協働」という概念を社会サービスの多元性を理解する一つの基礎理論の視座として形成すること、②これまで「規範的価値」にとどまっていた「協働」という抽象的な概念を、議論において操作可能な概念に転換すること、③「協働」を先取りした、社会サービス実践の理解、観察、分析に有用な理論と方法を提示すること、④「狭間」問題の解決、および社会サービスの促進における「協働」の具体的な機能とメカニズムを明確にする。論文は、序章と終章を含む9章で構成されており、その論理展開は非常にシンプルである。まず、序章では、従来の制度的支援における「狭間」問題が形成されるメカニズムを検討し、その問題解決に求められる「協働モデル」を概念仮説として生成した。続く第Ⅰ部（第1～3章）では、「協働」をめぐる理論枠組みを、理論背景、概念構成、および分析方法という三つの側面から構築した。さらに、第Ⅱ部（第4～7章）では、この理論枠組みを用いながら、具体的な社会問題、およびその解決における「協働モデル」の適用を実態に焦点化しつつ検証した。最後に、終章では「協働モデル」をめぐる最終的な検証結果、および考察を示した。結論として、本研究では「協働モデル」を、従来の「社会保障モデル」「生活モデル」の両支援戦略に残された「狭間」を埋める第三の支援戦略として提示した。それを「①従来の制度的支援から排除され、比較的不利な立場にいる社会的弱者の集団が抱える困難に焦点化し、②既存の制度的支援のしくみ、方法、または、あらゆる利用可能な資源、ないし当事者自らの力を柔軟かつ創造的に組み合わせることによって、③新たなサービスを創出・実施することを通して実現する支援戦略」と定義し、また、それに基づく支援の特徴を以下の3点にまとめた。第1に、「協働モデル」は、従来の「社会保障モデル」「生活モデル」と異なり、それ自体には何ら新たな「原理アプローチ」をもたず、その実現に必要なあらゆる要素は既存のものである。第2に、その一方で、「協働モデル」を新たな支援戦略として旗幟鮮明にしたのは、こうした既存のものを有機的に組み合わせるという考え方である。つまり、その基本のロジックは、従来の「社会保障モデル」「生活モデル」による制度、援助技術、あらゆる利用可能な外部資源、ないし不利な立場にいる人々自らの力などの要素を媒介にして、課題解決の目標を達成していくことである。第3に、こうした既存の資源の組み合わせに伴って、必ず何らかの新たな社会サービスの提供が創出されている。その内容とパターンは一様ではないが、対象課題の具体性に応じて、さまざまな資源を有機的かつ柔軟に組み合わせる「創造力」は、支援

活動に個別性をもたらす決定的な部分であり、「協働モデル」の実現に最も必要な根本的な特質であるといえる。従来の制度的支援の「狭間」において散らばって生じる社会的問題を、課題の実際の具体性に応じて効果的に解決するという点が、この新たな支援戦略がもつ最も大きな意義である。その一方で、協働によって創出されてきた新たな支援活動、援助技術などが、その実践の広がりによって 徐々に制度的に定式化・一般化され、「社会保障モデル」や「生活モデル」の一部を補足するようになることも期待できる。本研究は、この2点を「協働モデル」がもつ役割と考え、この新たな支援戦略を、従来の支援戦略に対する重要な補足として位置付けた。